

【福島大学むらの大学アーカイブ 18】 【大熊 Chapter 6】

出会いとつながり

—大熊の原風景と未来に想いを馳せて—

渡辺利綱さん



【インタビュー日時・場所】

第1回インタビュー 2023年9月28日・渡辺さんご自宅

第2回インタビュー 2023年11月14日・渡辺さんご自宅

【聞き手】

人間発達文化学類 樋口空

行政政策学類 根本蒼太、緑川泰成、渡辺駿

担当教員 鈴木敦己 実施協力 佐藤亜紀

プロフィール

昭和22年大熊町生まれ 大熊町在住。

2007年の町長初当選から、2019年まで3期12年大熊町長を務める。

2011年、震災と原発事故発生の際には、町民の避難を指揮した。

【第1回インタビュー】

—利綱さんの子ども時代を教えてください。

渡辺：私は農家の長男で、昭和 22 年生まれ、いわゆる団塊の世代っていうのはしりです。ですから、大川原の同級生なんかはいっぱいまして。私はここから 4 キロぐらいの、大野小学校っていう所に通ったんですが。そこから中学校は二つだったんですけど、その当時は同級生の 1 学年で 170 人ぐらいいました。

中学校卒業して金の卵なんていう形で、半数近くの人が集団就職で関東方面、東京方面に行ったんですけど。だから中学校卒業して、大野の駅で同級生を見送った記憶があるんですけど。あの当時は経済的な理由っていうか、生活するのが大変だったんで、優秀な人なんかも、中学校卒業でもう（東京に）行ったりなんかした時代でしたから。

だからよく、卒業してからも同級会やりたいっていう人がいっぱいいて、その人たちにとって同級会っていうのは、中学校までのなんですよ。そういう点では、よくわれわれも集まってやってるんですけども、昔の思い出なんて話しながら。

皆さんの年代では想像できないぐらい大変だったけど。確かにひもじい思いもしたし。学校の給食なんかも、高学年になっていくと学校給食っていうのがあって、パンとか脱脂粉乳とかがメニューにあった。（学校給食のない）われわれが 1 年、2 年の頃は、弁当を持って学校行った人は、やっぱり日の丸弁当と言って、梅干しが入ってる弁当をみんなこんなやって（隠しながら食べていた）。見られるのが恥ずかしいという思いもあって。

あと、ちょっとした学校の近くに小さなお店があって、そこに行って、こぶとかそばろなんていうのをちょっと買ってきて、ご飯にかけたりなんかして食べていたこともあるし。また、弁当持ってこれない人も何人かいるっていう時代だった。

—利綱さんが通った大野小学校は、大野幼稚園の裏にあった旧校舎ですか。

渡辺：そう、あそこなんだ。こんな小さな大川原でも、同級生が 40 人 1 クラスできるぐらいあったんだ。だから小学校の校舎が、教室が足りなくて増設したり、仮設の教室でやって。中学校に行っても、図書室とか化学実験室なんていうのが教室の仮設になって。だから友達はいっぱいたっていうか。

あの当時は結構、車も少なかった、なかった時代くらいだから。中学校になると自転車で通学だったんですけども、よく山学校なんていう、こうやってみんな道路歩かないで、その辺、こういう幹線道路の脇なんて歩いて。学校の近くにくっと、そっちのほうのやぶから出てきたり、こっちのほうから（出てきたり）。連中が集まってきたっていう感じで。

そういう点では、自分たちでは、昔はナイフなんて持って歩いて小学校時代はよかったんです。中学校のときある委員長が刺されて、あれからもう刃物持てきちゃ駄目ですよって言われるようになって。それまではナイフを持って歩いて、その辺でわなをかけるって言って、竹とか木とか何かを削ったりなんかして、わなをかけて鳥を取ったりとかやって。勉強なんかも、そんなに勉強する必要もなかったって言ったらおかしいんだけど。

—小さい頃の遊びについて教えてください。

渡辺：でも遊びっていうのは、本当みんなで集まる場所があって、公民館とか。帰ってくると、いろいろなことがあったね。よく、「べったべったーん」って言ったんだけど、こう（メンコのようなもの）、ぱっとあおったりして、自分でそれを確保して、かねのカバーを付けてぶつけ合ったり。こまなんかやったりとかっていろいろな。もちろんスマホなんかない時代だから、みんなが（家の外に）出て集まったって時代だからね。

学校に行くと、相撲が人気あったからね。土俵があって。大野小学校で児童会の選挙があったときに、女性の活発な人が、私が児童会長になったら相撲場を造りますって言ったの。選挙公約としては素晴らしいものだったんで、ダントツで当選して、そして相撲場を造って。みんなで遊ぶものがないから、今度は朝方出ていくとみんな相撲場で集まって、相撲やったりなんかして。

だから自分たちでいろいろ工夫しながら遊んだっていうか、みんなで遊んでたっていう感覚が強いんで。いじめなんかもやっぱりあったし。でも、そんなに陰湿っていうか、いじめられる子っていうのはいたんだけど、そんなに今の子どもみたいではなかったし。ガキ大将もいたけど、かばう人間もいたっていう感じで、そこそこ良かったのかな、いい時代だったのかなっていうか。

だから同窓会なんかで集まると、みんな勉強なんていうのはそこそこで、遊ぶのが忙しい仲間だったから、昔こういうことがあったとかなんかって（話す）。割と出席率なんかも良くて、今でもまとまっていますけどね。

—利綱さんは、ガキ大将だったんですね。

渡辺：そうです。割と私なんかはそういうのだった。私も長男だったんで、長男はうちを継ぐものだったという前提でやってましたから。私は普通高校、双葉（高校）に行くかと思ったら、「大学進学したらうちに戻ってこないから」って言われて、それで農業高校に行った。原町の相馬農業高校。あの当時、大熊からも 11 人か 12 人ぐらい農家の長男（が通っていた）。その当時、農業科っていうのがあって 112 人いたんですけど、全部長男だった。1 人だけ兄貴が亡くなったっていう形で。実質、全員長男。いわきから新地、山元、あの辺までの農家の長男が集まって、全部ですかね。

何年かたつと、もう農業っていうのが、いろいろ過渡期っていうか違う時代になって、農家の長男もそれぞれ自由に選べるようになったけども。

うちのじいちゃんっていうのは（旧制）相馬中だった。あの頃、（旧制）双葉中学はなかった、まだ。相馬中学校行って、大学に行っただけです。駒場って、東大農学部の前身だった、そこに行っただけ。そして向こうに行ったら、帰って（きたときに）「おまえ本当に農業やるのか」って言われて。ばあちゃんが「おまえは農業やるって言って出てったんだから、戻ってきてやるべきだ」って言われて、（じいちゃんは）がっかりしてて。

しょうがねえかってやったようだけれども。あの当時なんていうと、じいちゃんの教科書なんて見ると、やっぱり農業教育でも先端の教育受けてやってたから、植物病理とか何かっていうのはドイツ語でやったり、いろいろな教科書あった。卒業写真なんて見ると、生徒 1 人に先生が 3 人ぐらいいて、博士って、こりゃすごいもんだななんて思っていたけども。あの当時（の入試）は成績ばかりじゃなく、田んぼいくらあるとか、納税しているとかいろいろな要件があって、そして大学に行っただけ。

結構この地域の人っていうのは教育熱心で、2 軒先の渡辺さんて、今はヒロユキさんて、その人は

(旧制)安積中学に行って、第1回の卒業生。割と裕福なうちで、質屋をやって財産を残したって。

うちのばあちゃんっていうのは、福島女子高の第1回なんだ。寄宿舎に行ったときの話なんてして言われたけど、明治32年生まれなんていって。

結構、子どもの時代なんていうのはそんな感じで。原子力発電所が、ここに建設されますっていうのは、私が小学校5年か6年の頃かな。そしたらその当時、町民の人の中では「今度、原子力発電所ができれば、電気代がただになるらしい」なんて言って。これが一番大きかって話題になったときは覚えがあるんですけど。

だから、よくここは何もない所だって。人によって東北のチベット、福島のチベットなんて言う人いたけれども。考えてみると、為政者っていうか、発電所造るためにそんなこと言っただなんて言われて。別にそんなに貧しいっていう感じはないんだな、大熊は普通に生活できて。ただ、冬の期間はやっぱり農業が中心だと、どうしても出稼ぎとか何かに出掛けるっていう人多くなっただけけれども。

—利綱さんは、農家のお手伝いはされてましたか。

渡辺：結構やってたな。そして農繁期には学校も休み。農作業の手伝いやったりなんかしてやってたんで。でも、そんなにはやらなかったかな。一応、少しはやった感じですけども。

—渡辺家では、当時はどんな作物を育ててましたか。

渡辺：うちは養蚕やってた。養蚕っていうのはやっぱり換金作物っていうか。じいさんなんていうのは養鶏やってたから、そこに養鶏組合っていうのがあって。役場庁舎の前に小さな頭森公園っていうのがあって、あそこ池なんてあったけど、その池ではコイの養殖をやってるし。ここ(大川原)は随分、昔は進んでたんだ。

あと、後ろの橋のちょっと手前の所で、おやじんとこのドジョウの養殖やって。だから、ドジョウのコンクリートの養殖場が残ってる。

あんまり早く進み過ぎたんだな。だから、なかなか個人ではできなかったっていうか。共同作業なんかもやってたし、土地改良の事業なんかとかって。だから結構、時代の先端を行ってたっていうか。

—「時代の先端」ですか？

渡辺：私、国民健康保険っていうのは戦後できたのかなって、最初そういうイメージだったんだ。片付けか何かしたとき、じいちゃんの表彰状が出てきて、そしたら昭和15年に国民健康保険で大臣から表彰状もらってるんだって。「あれ、15年とはそんなに早くから」って言ったらば、うちのじいちゃんの口癖っていうのは、大病したりなんかして農家の人たちが土地を売ったり、財産放して、そして療養費に充てるっていうようなことがあっては駄目なんだよって。国民健康保険の徴用制度の何かって(言って)、それを普及させたいと。大概、(制度は)西のほうからこっちに来るんだけれども。割とそういう点では、国民健康保険制度ができたときから普及とか何かに努めたっていって、大野は結構(熱心だった)。

だから、いろいろな人が確かにいたけれども、その熊川の重遠さんっていって。前の資料見てきたら、(そこに)志賀直哉ゆかりのグミの木なんてあるんだけれども。

だから一度、石田宗照さんの所、茂宗さんの所と、志賀直哉さんの父親が来たのかな。先祖と血のつながりがあってここに来たりして。今でも阿川弘之先生が来たりなんかして、昔の資料を集めたりなんかしてましたけど。

同じく、その石田仁ちゃんの所のおばさんが、前の東大総長の有馬朗人さんの奥さんになってるから、有馬先生なんて、ここ何回も来てるんだ。だから、有馬先生なんていうのは、疎開、戦争中で来たりなんかして、結構いろいろな人のつながりがあるというか。

あと、熊川の半谷医者ね、あの人なんか、うちのばあさんなんかもいところ同士だったから。仙台さ行ったときに、「鲁迅と机を並べて勉強したんだ」なんて言って。結構そういういろいろな人脈があったっていうか。

弟さんっていえば、重遠さんから来た渡辺さんっていうのは、平一小で爆撃受けて亡くなったんだけど、校長やってるんだ。石田二郎先生なんていうのは慶應病院の院長までやってね。慶應大学の名誉教授なんてやってたから。その人の奥さんっていうのは、北里柴三郎の娘さんなんだ。

昔の人はよく頑張ったよなって。それに比べると今の方は駄目だって言われるけど。しょうがねえもんな、それは。

だからそんなに、なんか特別なことしたんじゃないって、そういう人が先祖様とか、われわれ小さいとき行って、いろいろ話聞いたりなんかずっと、なるほど、こんな田舎の町からも東京に出てって一生懸命頑張ったりなんかして、ああやって先祖もいたんだとか。そういう点ではあんまり驚かないというか、相当近くに来たりなんかしても、そういうあれですかなんていうような感じで。

一人脈についての想いを教えてください。

渡辺：私、卒業して戻ってきても、うちのばあちゃんなんかは昔の人だから。よく親戚関係なんか行ったりなんかしたら、俺も年寄りの話聞くの大変なんだけれども。お小遣いもらってやっからって行って、ガソリン代だけもらって、俺、しょうがねえから車乗って行って、こうやって一緒にいろんな話聞かされて。でも、ああいうのっていうのは、今、大人になってから大事だなと思ったんだね。今はもう親戚付き合いとか何とかっていうのは少なくなっちゃったけれども、（当時、私には）昔の話を聞かせてくれたりなんかして。なるほど、そういうことも大事なんだなって、いろいろな教えられることがあったんで。

だから、うちの自慢話に取られるとおかしいけど、ここのおじいちゃんの弟っていうのは、海軍工廠で海軍に行ったんだけど。技術少佐まで行ったのかな、三国同盟結んだときにイタリアに行ってる。そしたら俺、何気なく『文芸春秋』読んでたら、大叔父の名前が出てきたの。あれっと思ったんだけど、田舎にばかりで時々出てこいって言われて（東京に）行ったときに、丸の内にビルがあって、そこでムツリーニと一緒に撮った写真なんかあって。

一渡辺家の経緯について教えてください。

渡辺：私たちの先祖っていうのは、石巻のカサイ家って、葛に西って書いて、葛西家っていう所がもともとだ。

だから石巻、宮城県の人なんだけど、日和山神社って行って、『大漁唄いこみ』に出てくる愛宕神社のご神体っていうのをこっちさ持ってきたんだなんて言われてるんだ。そして、お家騒動でこっちに来

たって行って。

私で19代かな。だから息子で20代なんだけど。この間、相馬公700年祭なんて行って、（相馬公が）千葉からこっちに来てから700年になりますなんて（相馬家）33代が言ったけど、うちは19代、20代ぐらいかな。息子には、「おまえはここの長男なんだから、ちゃんとうちを守っていくのが仕事なんだよ」って言ってやった。学生のとときにアルバイトなんてやって、「今年は忙しいから（年末の仕事は）駄目だ」なんて生意気なこと言ってっから。

暮れの仕事っていうのは、お墓掃除と氏神様の掃除っていうのが二つあって。お盆に来たときには神棚掃除させて、迎え火っていうか先祖様を迎える、火をたくっていうのが彼の仕事で。あと、暮れには氏神様を掃除させるんだ。「こんなこともやらなかったら仕送りストップするからな」って（息子に）言って。「そうじゃ、やらなきゃいかんべ」なんて言って帰ってきたんだけど、「アルバイトやって忙しいんだから」（って言われた）。

だから、うちを継ぐもんだと思って。本当は（卒業後は）こっちに来て、「農業でもやりながら勤めっか」なんて言ってたんだけど。（卒業時は）ちょうど震災の年で、だから3月の卒業式やらなかったんだ。後で何年か過ぎてからやりましたけど。

うちに帰ってきて（まだ会津に）避難してる時だったんで。「県内から出たときねえんだら、東京へ行って勉強してくるのもいい意味では社会勉強だから構わんよ」なんて言って。今10年過ぎたからな、10年。（息子は）「俺、いつ戻ってくればいいんだ」なんて言ってんだけど。

東京は給料がいいけど、物価が高だけ。大田区にいと、本当に下町の蒲田なんかもあれば、羽田の飛行場も、あと田園調布なんていうのもあって、面白い所あるんだなんて言って。人口70万ちょっといて、23区のうちで3番目ぐらいに人口が多いんだって。120～130人、同期の新しい職員なんかがいるって。残業時間がすごくて、超お金になるんだなんて喜んでるけど、「おめえ金とかじゃねえどって、体壊したら（どうするんだ）」なんて言ってんだけど。でも、やりがいがあるんだかなんか。

だから本当に、震災でみんな人生変わりましたっていうのは本当だもんね。良く変わったっていう人もいれば。よくも悪くも能力がある人は大丈夫なんだな。

—中学校に上がったからは、どのような遊びや暮らしをされていたのですか。

渡辺：俺なんかは、今は鈍いけど、あの当時は運動神経良かったほう。自分で言うな、自己評価で。中学校のときは野球やって、一応ピッチャーで5番くらいやったな。あとは音楽なんかも、合唱クラブっていうのは特になかったんだけど、各学校対抗の合唱コンクールあって、あれで大野中はたまたま入賞したんだ。そして県大会に行って。そのとき俺、（合唱クラブの）メンバーなんだ。

ところが俺なんか、ただ口パクパク動かただけで、全然そんなのやってなかったんだけど、だから運が良かったってかね。俺、今でも話出るんだけど、同級生の女の子が毎日いつも練習して、そして大会当日に体調崩していげねかったんだ。俺なんか野球のほうに忙しかったから時々顔出すくらいで、そして後ろにいても、ただ口だけ動かして。それで向こうに行って泊まったりなんかして、いい思い出か。結構いろいろなことやってたかなっていうのもある。勉強なんてほとんどやんなかったけど、かたくなに。でも、あの当時はそれでも通用したんだ。授業さえ聞いていけば大丈夫だったっていうか。

—野球は、週末とか放課後にされていたのですか。

渡辺：そう、放課後にいつも。やっぱり部活はみんなやってた。野球も結構強かったんだ。郡大会で、あともう一勝ってところであれ（敗戦）だったんだ。上位 2 校が県大会に行けたんだけど、1 点差で負けちゃって 3 位止まりだった。

—休み時間は何をしていましたか。

渡辺：休み時間って言うと碁なんていうのは、碁盤がないから、碁並べなんかもよくノートにやって遊んだ。いろいろな遊びあったな。とにかく遊ぶことには事欠かなかったっていうか、自分たちで、みんなでいろいろなことやってたから。

—山や川、海に行ったことはありましたか？

渡辺：学校の近くの権現山行って、そこは碎石した所あるんだけど。よく秋とかは、小学校のときも行った。大川原の頭森公園に桜が咲いて、それを見に遠足で来たんだ。

—小学生当時は、生徒同士の雰囲気はどうでしたか。

渡辺：みんな仲良かったな。でも成績なんかも、模擬テストなんて貼り出すとかあったけど。勉強できなかった子どももいたのはいた。順位を付ければ、1 番から 100 番までなるっていうのはしょうがないんだけど。

でもやっぱり運動会で特技を発揮する人とか、あと、学芸会もあって主役になる人もいれば、その他大勢の人がいるのは、これはしょうがねえっていうのはあったりする。でも、われわれのときにはよく運動会もノートとか、相撲大会なんて俺、相撲強かったから。景品として、こんなノートなんていっぱいもらった。

—子ども時代は運動することが得意だったのですか？

渡辺：俺、相撲は結構強かったよな。運動神経、割と良かったほうなのかな。

あと、走ったりするのも紅白の選手って言われて。だから結構楽しかったっていうか。でも運動会なんていうのは得意な人はいいけれども、走るの苦手な人は全く苦痛なんだ。だから今の子どもたちなんて、そういうことがないようにって言って。よく人生ゲームなんて言って、なるほど人生と同じで、いつもトップ走ってても、最初からぶっちぎりで優勝したんでは面白くねえから。なんか因があったり運があったりして、そういうのはいいなと思って見てたんだけど。

だから、お互い認めるっていうことが大事だっていう思いは私個人的にはあるんだけどね。得意な分野の人はそれで意気揚々って言うか、やっぱり存在価値が認められるんだよな。運動会っていうと張り切る人もいれば、走るの駄目だけど、学芸会っていうと得意な人もいるし、歌の得意な人もいるし。

だから、そういう点では、特に成績とかでいじめられるっていうことはなかった。全体として、みんな仲良くやってたっていうのはあるな。

—幼いころの食にまつわる思い出について教えてください

渡辺：食べ物っていうと、やっぱり最初の頃っていうのは、自分は戦争のない時代に生まれてきたのは最高の幸せやった。そんな時代なんだからって思ったけれども。仏壇に、田舎は朝ご飯食べる前、ちゃんと（お供えを）上げたり、お茶を（上げたり）っていうときに、おじさんの写真が2枚あったんだ。おじさんっていうのは、1人は戦争で戦地に行って亡くなって。そのおじさんは早稲田に行って角帽かぶってんだよな。だから学徒、卒業してすぐだったのかな。もう一人のおじっていうのは、弁護士になりてえとかって行って法政大学に行って、2人とも学生のときの写真を飾ってあった。

うちの亡くなったおばちゃんは、戦争で亡くなった（息子の遺族）っていうのは、遺族年金っていうのをもらってる。そしたらば、息子は親孝行したんだって。私にずっと、毎年、遺族年金なんていうのをもらってるから、お金をくれることをしてくれてるんだって。だから負け惜しみっていうか、そういうことでも思って、自分のこと慰めていたのかなと思うけど。あの時代は亡くなったら、本当に一番いい時代だからね。

下の弟っていうのは剣道やってて。大学で剣道やってたから、無理したっていうんだな。そこで昔の結核っていうかな。（おばちゃんは）こっちで休んでやんだけど、そのときに代用教員ってやって、富岡町に行って。下の弟はそんなときの教え子なんだって、私に習ったんだって言ったけど。戦時中っていうのは、自分の意志とは関わらずああいう形で、一番いい時代に亡くなって行って。それから見たら私なんか、これはいい時代に生まれてきたんだっていうのがつくづく感じたんだけどね。

けども、平成23年の原子力災害では、人生っていうのは本当にまさかの坂があるんだっていうことを実感した。でも戦争のない時代に生まれてきたっていうのは、一番運が良かったことかなって思うんだけどね。

—当時はひもじい思いをしたことはありましたか？

渡辺：ひもじい思いはあんまりしなかったね。農家だから、普通に食べれてたかな。でも、ぜいたくはできなかったな。肉なんか、カレーにソーセージが入ってたり、そもそもなかったりなんかして。あと、学校給食っていうのが脱脂粉乳だったからな。でも食べれるだけいいのかなと思って。みんな鼻なんかつまんでぎゅっと。残したりしたら大変だから、昔の物のない時代になんて、先生に怒られる。だから、鼻をつまんで脱脂粉乳も飲んで、食べれるだけいいんだって思って。

魚なんかは食べるよな、結構。小名浜とか豊間の辺から行商で来る魚があつて。だからメヒカリなんて、小名浜の今、いわき市の魚になってるけど。メヒカリなんてあんなのは、くれていったんだ、おまけで。今はメヒカリも高くなっちゃったけどね。そこでカツオとか買って、井戸とかにつるしておいたんだ、冷蔵庫ねえから。（行商は）家に回ってくる。2日か3日に1回くらい。一軒一軒、来てくれよるんだ。車で結構来たんで。そうすると、いつもお得意さんみたいな感じで寄ってくれるんだ。

よく俺たちの頃は柿を取って食べたり、イチジク、梅なんかも、みんなで塩なんて持って歩いて。すかんぼ（イタドリ）なんて覚えあるかな。柿なんかも、そんな熟さないうちからみんな食べてやるから。よくおなか壊さなかったってか。道なんて歩いてると野イチゴ、あれなんか大事な食糧源だったんだな。

今の子どもは全然食べねえもんな。アケビなんかも食べねえんだ。「そんなの食べれる？」なんて、うちの子どもたちも言ってるんだ。「お父さんの時代は靴なんかなくて、わらじ履いてんのか」なんて言ってる。「わらじまでは履かない」って言ったんだけど。全く全然、感覚的にずれてるっていうか。5

月、6月頃、田んぼがあんなに黄色くなったりすると。あれ麦なんだよね、6月頃が収穫時期だから。「お父さん、田んぼの稲が黄色くなってきたぞ」なんて言ってるから。あれは、麦って言うんだって子どもに教えたんだけども。

柿も取って食べて。自分の所はいいけれども、よそのうちの柿も取って食べてたんだな。だから梅もそうだもん。塩はポケットに持って歩いたんだな。その辺歩くってか、大体（学校まで）4キロも歩くんじゃ、どこの柿はうまい柿だとか、どこにイチジクがあんだとか、干し柿なんて何となく食べ頃だなんて（言って）取ったりして。それも楽しみって言ったらかおかしいけど、遊びの一つだったんだな。

川には魚取りに行ったしな。春先になると石の裏にカジカっていうのが卵を産むんだ、黄色い。そんなん取ったり、魚取りしたり。その辺にあったギンナンとアケビと、コクワなんていって、サルナシなんか取ってたんだ。あとは、山ブドウを取りにいったり。だから、そういう点では食料の宝庫だった。山とか川歩いてれば、今では想像つかないっていうか。あんまり、本当50年、60年ぐらいで生活が極端に変わり過ぎたっていうか。そういう点では、生活力があるっていうか、われわれは。

だからへびなんかも、ここ田んぼっていうと結構（いて）。あと養蚕やってたんだが、桑を切りに行くと、マムシがいて、それも食べてた。必ず1年に、毎年2本か3本くいとるんだ。そこに蚕小屋があったから、炭をおこして乾燥させて、そして桑を切るだけけれども。そこで炭をおこしたときに、マムシを取ってきて皮をむいて、がっとならで焼いていくんだ。うまいんだ、マムシが。こんがり焼いて食べる。うちの子どもなんか食べてたよ。

—マムシを捕るのは危なくなかったのですか。

渡辺：その辺は慣れてんだ。なたで田んぼに行くと木を切って、ちょっと真ん中に割れ目を作って、首んところ、くっと。それで縛っておくの。殺したら駄目なんだ、食べるから。それで帰ってきてから、ぱっと、なたで首を落としちゃえばあとは大丈夫。共有地っていって、ここは、大川原は地域の人たちが持ってる山ってあったんで、刈り払いやったりしたんだ。僕が20歳の頃は、林業っていうのは木材が結構いい値段で売れるんだね。きょう植栽した木がちょうど20年、30年ったら売れ頃になるから、あれを伐採してハワイ旅行の経費っていうのが夢だったんだ。だから、みんな大きな鎌持っていって。

その前の公民館の所に、きょうは20人とか何人で、でも仕事で来れない人からは出不足（金）っていうのをもらって。2人ぐらいは早く帰ってきて炊事当番やるんだ。ニンニクと刺し身と酒用意しておいて。帰って、今度はそこでいろいろ酒を飲んで、いろいろな話をする。

だから、そういう点ではコミュニケーションっていうか、地区の人の結び付きっていうのがものすごく強かった。特に、仕事なんかも農作業っていうのは、小さい子どもから年寄りまでみんなで助け合ってやる。だから春先は水持ってくるのに水路を整備する。途中で草を刈って水の流れを良くするとか。

あと、お盆のときには共同で草刈りをして、お墓に行く墓地の道路を整備する。春先は田植えやって、終わってみんなでそこに集まって、それぞれが自分のうちで得意な料理を持ってきたりなんかして、集まって酒を飲むっていうか。その中で今度は歌ったり踊ったりっていうか、そういうのをやるわけだ。

だから、本当に家族同様っていうか、だから同じ地区内で病人が出たとか、何か状況が悪くて仕事が遅れるなんていうときは、みんなで行って手伝うとかそういうのがあったから。だから、早苗饗（さなぶり）なんて言って、そういうのが一つの楽しみだったんだな。みんないると、中には芸達者な人もいるから、踊りとか民謡とかなんかも。ダンスなんかやる人もいるし。

—皆さんでダンスを披露する会のようなことをしていたのですね

渡辺：そう、飲んで。だからみんなそれぞれの、お煮しめを持ってきたり、あと得意の料理っていうか分野でみんな持ち寄って、集まって、飲んで歌い踊れだったから。よく、きょうは雷神様だなんていって、田んぼに入れない日があると、「入ると雷が落ちる」なんて言ってる。あとは、「きょう農作業やると実りが悪いんだから」なんて言ってる。あれは生活の知恵で、そんなこと言ってるって休む一つの口実だったんだ。その日は、また集まって、みんなで一杯やりましょうと。「こういうものを食べましょう」なんて言ってる。これやってやるんだ。

だから、本当に家族みたいな形でやったんだ。震災の後に行ったときなんか、みんなばらばらになったから、大熊町、一つの町をつくりましょうなんて、こうやったんだけど。私は、人が単に住めば集合体とかコミュニティができますなんて、そんな簡単なものでなくて、いろいろな日常生活の積み重ねっていうのがあって。相馬藩なんて、千有余年の歴史がありますって言って、ここ国替えも何もなかったから（積み重ねもたくさんあった）。

だから、野馬追のために戻ってきたとか、檜枝岐村に行ったときとか、そういう面では文化面とかそういうことの結び付きっていうのも大事だなと思ったんだ。単に仕事、経済的な面ばかりじゃなくて。

—そのような集まりはどのくらいの規模でしたか？

渡辺：行政区単位のとくと、あと少人数でやったり、気の合う人でやったりとか。大きなときには行政区で 50、60 軒なんていうときもあるかな。そういう点では、町民大会なんていうのがあるから。そうすると大熊は九つの行政区があって、行政区対抗なんていうと盛り上がるんだ。だから綱引きなんていうと、みんな夜集まって練習したり。あとは玉入れなんていうと、練習して。対抗意識っていうか競争させるっていうのは、そういう点では、いい意味。そして優勝、順位に賞金なんか混ぜてやると、「あそこの行政区には負けてられない」なんて言ってる、張り切ってやるんだから。どこの行政区もやるんだ。そういう点では、いい意味で競争意識を高めて、そして盛り上げるっていうか。

あと、やっぱり楽しみも少なかったから、そういうの終わると必ず飲み会があるわけだ。「きょうは楽しかった」、「きょうは良かった」なんて言いながら、二日酔いなんていって、みんな公民館に泊まったりなんかしながら。逆に何かあったときには団結力もあったっていうか。隣組なんていうのは家族同様だったって言うけども。それは長所なんだけれども、逆にあんまり干渉され過ぎるとか、いろいろそこまで入ると弊害もあることは確かだけだね。

でも、私なんか（震災後、大川原に）帰ってきて 4 年だけでも、心の原風景っていうか、山があって、こっちが海でなんていう原風景は変わらないんだけれども。やっぱり（震災から）10 年、12 年ぐらいたつと、今までいた人がいなくなったとか、そういう点では一番寂しいっていうか。うちなんか特にここは、前はお店屋さんなんて 3 軒ぐらいあったんだけど、今なくなった。そうすると（昔は）朝、雨降ったり雪なんていうと、大体その近くの辺の人が来て、「きょうは何で一杯やろう」なんて言うわけです。朝方来るんだから。1 人だけじゃなくて、2 人か 3 人も来るんだから。「きょうはどうだ」なんて。「きょうはあれだな、今の時期ならキノコが出てっかもしれない」なんて言ってる。

じゃあキノコ採ってくるからとか。今度は川に行ってお魚取ってくるからとか、そういうあれ（人）が結構いたんだ。みんな特技持ってる人がいて。夕方になってくると集まってくるんだ。3 人も 4 人も来て、特別ごちそうなくてもやっぱり雰囲気があるんだ。

うちの、小学校の子どもなんかも、「きょうは家族の日だ」なんて言って。最初、何言ってんだなんて思ってたら、(その日は普段と違って、地域の人が)誰もいなくて家族だけの集まりだったんだって。だから、そこまで人が来てたんだな。そんなに特別ごちそうするとか何かでなくて、集まって世間話をしたり、いろいろな話題提供があったり、自分の得意な分野あっから。「俺、魚取ってきた」とか、「キノコ採ってきた」とかなんて言って。

だから、アユの解禁なんていうと、こっちはいろいろ来たり、今度はヤマメの解禁が始まったなんていうと、今は坂下ダムなんてなかなか駄目だけれども、あそこにワカサギなんか産卵するのにだっと集まって川に上ってくんだ。

そうすると、あそこで、産卵したやつを鉄筋棒っていうか、あれでキンキンやって細く管になってる管の所に、むそう網っていう網をかけておくんだ。そうすると一網打尽なんだ、本当に。バケツに一つぐらい取れるんだから。水がきれいだから、ここ上流に人家がないからな。それを取ってきて、今度ワカサギの天ぷら。そしたら油の中でひゃっと泳ぐんだから、魚が。これはうまいんだ。桧原湖のワカサギどころじゃねえんだ、取れたてだもん。あれで酒なんか飲んだら最高だ。ニワトリなんか取ってきて自分たちで料理してやったり。中には、どぶろくなんか作って持ってくる人もいるから。だから、酒とさかなには事欠かない。

でも、そういうことがあるから結び付きも強くなるし、単に経済的な結び付きって、これ当然大事だけれども、歌や踊りとか本当に文化的なつながりとか何かってというのは大事だと思うんだ。

—大川原でのお付き合いは、震災後どうなりましたか？

渡辺：震災の前までは、そういう形で続いてたから。だから震災があって、みんなそれぞれ各家族っていか別れ別れになると、女の人なんかは割と順応性が高いから、すぐ「新しい友達ができた、町長」なんていいけど。お茶飲み話で花咲いてるんだけど。男の人はねえな、不器用だから。酒を飲むとかパチンコやるくらいしかねえんだって、かわいそうなんだって。そうして精神状態がよくなくなったとかって入院したりとかなんかっていうのも結構いたし。囲碁とか将棋とか何かいろいろあって、趣味を生かしましょうなんてやるんだけど、なかなかそれができなかった。

—いつ頃から町長になることを考えておられたのですか。

渡辺：私は議員とか町長とか嫌いだったんだ正直。じいちゃんが村長やってたから、うちの仕事なんてほとんどやらないで。あの頃は名誉職でやってて、そして現職のときに亡くなったんだ、現職で。そこで村葬なんてやってもらったんだけど。そんなことやったら大変だったってうちのおやじは、あれ早く亡くなったからよかったけれども、(長く務めれば)財産までもなくなったっていうぐらいだったんだ。

私の父親は弱かったから、村長やったりなんか周りのそういう声が結構あったんだけど、そういう役やらないかんねえぞなんて言ったけれども。俺そういうのっていうか、既成事実みたいな感じで議員やったりなんか当たり前みたいだから、それだけやりたくないって思ってたんだけどな。

でも、たまたま 40 (歳) のときかな、生意気なところあったから、いろいろ見えるところもあるし。若気の至りで、あんな町会議員なんて、あんなの足けんけんだなんて俺も言ったんだよ、飲んで。足けんけんなんて言うのと、いや、違うわ、一回口に出すと、なかなか取れんもうてなったな。そうして議員やる羽目になっちゃったんだけど。

でもそんなとき、人に任せて文句言うんだったら、自分たちでつくればいいんだと思って。だから評論家とか本当にコメンテーターとか何とかって言って、言うだけでもって自分が蚊帳の外にいる人が文句言うんだったら自分でやったほうがいいってなって。失敗したけどしょうがねえからやるようになったんだ。

だから、今の若い人なんかも、本当に私なんかよりはるかに立派な考え持っている人もいっぱいいるから、「出てきてやったほうがいい」って言うんだよ、俺。そして地域っていうのは、しょせん自分たちがつくり上げるもんなんだというのは昔から基本としてはあったんだ。俺なんかも青年会とか何かもやって、一応、青年会の会長とかもやったのかな。

あの頃は町で若い人の集まりなんて、いろいろ文化活動だなんだって生意気にやったりしてたから。地域は人に任せておくよりも、それはそれで大事なんだけれども、自分たちが汗を流したり、努力してつくり上げるものなんだと。これが基本にはあったんだな。だから議員やってるうちに、だんだん町長とかなんかかっていうのは声掛かって、困ったなと思ったんだけどね。

たまたまうちのおばさまっていうのも、父親が村長なんてやったときの苦労を見てるから。特に原子力発電所の町の町長だけはやるなって言われたんだ、俺。

—議員当時から町長をやるだろうと言われていたのですか？

渡辺：前町長が名町長で5期もやったんだけど、体弱かったから。だから出るようになって、議員の人たちも来て、議員の人たちみんな推すからどがんかってやっちゃ。しょうがねえっていうか、議員やってた手前もあって町長選挙に出るようになったんだけど。あの当時途中で、現職の町長が下りてくれたから無競争になったんだけど。無競争でも、やっぱりずっと歩ったから、昔の選挙は。それぞれの世帯を回って歩いて、最初のときは。「お願いします。渡辺です」って言って、全部回って歩いたんだな。

それで、選挙事務所を構えて、そうすると行政区の人とか応援してくれる人なんか事務所に来て、ちゃんと炊事とか何かやってもらったり。あと、一緒に歩いてくれたりって。ただ、そういうことやると、選挙の宣伝っていうのは大事だなと思うのは、こんな俺みたいな人間でも、周りの人たちが自分事と捉えて一生懸命やってくれるんだから、きちっと恩返しのためにもやらないといけないっていうか、それはやっぱり痛切に感じたんだな。

だから、先、議員やったときに、議員の選挙運動って5日間ぐらいだから、一応マイク、街頭演説もやって歩くんだけど、そうすつと、その前の公民館の所で、打ち上げやるわけだ。みんな集まってるから、じゃあ早く来てって言って。何あいさつすっかなって考えたときに、じんと涙が出てくるっていうか。俺、自分では、こんな俺みたいな人間のために本当に。選挙期間は5日間だけど実際は1カ月くらいかかるから、前から。でも涙見せるわけにはいかねえからな。強気な話しなきゃいけないでしょう。それでここに帰ってくると、いっぱいになってんだ、ここで。「5日間お世話になりました。ありがとうございました」って言って。

ここさ来て、ここの部屋、応援してくれた人なんか集まると、100人以上もみんな戸なんか開けて（打ち上げを）やんだ。俺なんか、ようやく終わったなんて安心して酒飲んでると、後ろの先輩が、「投票日は明日なんだから、きょうまではちゃんと自重しておとなしく飲まなきゃ駄目だぞ」なんて言われて。

そう言われるとそのとおりでななんて思ったけど。そんなことやって、町長選挙はしょうがないかなっていう形が出るようになったんだけどね。

だから、あんときおばさまの言うこと聞いて、こんなことやらなかつたら苦労もなかったんだけどなって思ったんだけど。一つの天命っていうか宿命だったと思うんだな。やりたくてもやれねえし、やりたくなくなつて、それをやらざるを得ねえときもあつたら。やらざるを得ないときには、しっかり全力投球をするっていうか、いろいろな人に支えられて天職を全うするようになったんだから。やっぱり先輩もいろいろいっからな、いろいろな人。やったらば、きちっと王道歩んでけろなんて、いろいろな人からいろいろなことを言われたけども。近くにいる別の先輩だったけど、この人は親戚筋にもなるんだけど、議員でもあつて「おめでとうな」って言うてくれて。そういう言葉っていうのは（記憶に残ってるんだな。

だから、本当に悪いことしたりとか、お金もらってやるなんていうのはとんでもねえやからかと思つて。国会議員も金のためにと言われる人もいるけどがっかりしちゃうけどね。だから、大変だけれども自分のできることっていうのは限られてっけども、恩返しするっていうか、少しでもお世話になった分恩返しするんだっていう気持ちだけは忘れないけどね。

12年間やらせてもらったけれども、体調悪いから2期目で辞めようと思つたんだ。辞める、体調悪くて迷惑掛けたら大変だからって。一回辞めるって（震災後に）言つたんだよ。そしたら、ある町民の人が「なんだこの俺のこと見捨てるのか」とか、「なんだ逃げ出すのか」なんて言われて。別に俺、悪いことしてるんじゃないから。辞める、進退なんていうのは極めて簡単なことだと思つたんだ、俺は。本人の判断。でも、ここは原子力発電所っていう立地町の町長だったから、国とか県とか周りからも注目されるっていうか、いろいろなプレッシャーもあつたし。

しょうがなく、息子なんかも「お父さん、誰か立つ人がいるんだつたら辞めたほうがいいんだよ」って。「家族なんか誰もやってもらいたいなんて思ってる人いねえんだから」って息子に言われた。「確かにそのとおりでべ」って言つたんだ。でも、いろいろな客観情勢考えると、そういうわけにはいねえんだ。選挙で負けるのは恥でねえんだ、別に。俺の大事な言つてることも分かんねえんでは、町民が悪いんだくれえで、開き直つて辞めればいいんだ。ところが選挙に出ねかつたつたらば、おまえの父親は、大事な時期に敵前逃亡したとか、後々孫の代まで言われつたら、「出て負けるのはいいけれども、出ねえわけには今回いかねえんだ」って言つたんだ。「困つたな」なんて息子は。あれ、今でも覚えあるんだけど、確かに本当にあるんだ、家族なんか、こんなことやってたつて、本当に家族のためになるなんていうことはねえから。

あんとき腰痛で、腰痛くて。また休んだりなんかすつと迷惑掛けちゃうから。でもやっぱり、あの当時は大変だったからな。でも何とか支えられてっっていうか、だから震災も、確かに悪いことばかりでなくて、いろいろなご縁があつて、いろいろなこと教えられたり、いろいろな人に助けてもらつたりとか。本当に経験したことがないようなこと経験させてもらったから、そういう点はありがたいっていうか。だから職員なんかに言うんだ、「悪いことばかりでねえんだから、これだけ大変なことを乗り越えてきたんだから、これぐらいの思いしたらばどんなこともできるんだから頑張つてくれな」って。だから辞めた後、今なんか気楽でいいけどな。

本当に首相官邸には何回も行ったし、総理大臣には会わせてもらったし、当時の総理大臣なんかも、私、当時の総理大臣の記憶のほうが多いんだけど、大川原にきて、線量計持つて、「町長、大丈夫だこれ。私の郷里の山口県より線量低いから」って、そんなことを言つてたり。

—避難生活の中でどのように大熊を意識していたか教えてください。

渡辺：大熊を離れてから最初、田村の体育館に、次、会津に行ったときにも、私は戻るっていうのが、帰るっていうのが、至上命令じゃないけれども、当然だと思ってるんだ。だから帰りますって言って。あとは2期目のとき選挙になったんだけど、そしたらもう一人の対立候補っていうのは、大熊はどうせ帰れねえ所だから、新たな町をつくりましょうっていうのが、彼の主張っていうか、これをマスコミなんかがあおり立てるんだ。対立してるっていったら、片っぽは帰還する、片っぽは新しい町をつくるなんていう形で取り上げて、マスコミなんか面白おかしく書かれてたんだけど。私は帰るのが当然だと思ってたんで、だから、「帰れる環境をつくれますよ」って言って。「戻るんだから」って言ったんで。「あんな戻らねえ所になんてお金をかけるんだ」とかって言う人も結構いたんだけど、これも正解なんだ。だから、本当に正解のない答えを求めてっていうのが、町長職にあるときは絶えずそうだったもんな。

だから今でも、これでよかったのかどうかっていうのは絶えず反省してるし。余裕、だんだん慣れてくつとね、みんなに言われっと分かりましたって、十人十色だけどみんな考えてしまうからね。だから、あなたは間違ってるけど、あなたは正解ですなんて言えねっし、みんなそれぞれの考えあるんだけど。分かりましたんで、もう私も自分のスタンスでやらせてもらいますからって、だんだん2期、3期ってやってくと、開き直れるっていうか、いちいち聞いてもしょうがないっていうか、こんなこと一度はやんねけども、口には出せんけどな。正直そんな思いでやってたんだな。

今の町長にも言うんだ、トップなんか、町長なんかやってっと、大体批判されて文句言われたりするものが7割、8割なんだから。だからこれ、言われるのが普通なんだからって、だから開き直ってやるしかないんだよ。でも1期目から開き直るなんてできねえから。

俺なんか（最近）は町長時代と比べて穏やかになったとか、若返ったみてえだなんて言われっと、今、現職があれだけ苦勞してんのに、俺、今度解放されたからってニコニコしてるっていうわけにもいかねえんだ。そんなこと言うなって言うんだけど、自然とそういうふうに出てくんのかと思うんだけど。あれ大変だよ。

だからやっぱり開き直る。開き直ると自己満足だなんて言ったんだよ、自分で務めてこれんのはって。文句言われるのが普通だからね。これしょうがねえんだ、（震災で）あれだけ本当に一人一人の人生が変わりましたなんていうこと。自分のうちを追い出される、ましてお墓まで取られるなんてこと考えなかったっつって。俺、80過ぎのじいさんに言われたのが今でも残るんだけど、戦争時代よりもひどいって。戦争時代も大変だったけれども、うちから出ていけてまで言われなかったって。それで今は、うちから出ていけて言われて、お墓まで置いていかないかんやどって、戦争当時よりひどいって言われた。なるほどなっていうか。

だから国の人なんか、復興庁のある役人の人が、「うちを離れる苦勞っていうのは分かります。私も父親の仕事の関係で3回も4回も学校もあれも変わりました」なんて言われたら、「おまえ、何考えてんだ」って町民の人が怒ったんだ。「転勤で変わんのと、われわれがうちを離れていくっていうのはどうい違いがあるか、こんなことも分かんねえのか」って言って。復興庁の次長、あれかなり上の人だったけれども、どうもすみませんでしたって謝ったけれども。そうだよな、そんな感覚で考えてっから駄目なんだと。

だから今の町長にも言うんだけど、「町長、大変だけど、なりたい人もいるけれどもなれねえ

人もいるんだから。良く解釈して、町長大変だけど頑張ってくれ」って言うんだ。あれだけの大量の得票でやったんだから。町長のやつ、なりたくてなったんじゃないねえ、でも自然とそういう成り行きになっちゃったから、そうなんだ。

でも、いろいろなこと教えられてっから、いろいろな人に恵まれるっていうか。田村の体育館に来たときなんか、農家のお父さんが軽トラックの後ろに「今、灯油少なくて暖房とるのに大変だっていうから」って言って、携行缶で灯油つけて（持ってきてくれて）。あと30キロの米つけて、「町長さん、私ができることはこれぐらいしかねえんだ」と、「申し訳ねえけども」って言って。いや、「それどころでねえんだって」なって、「こういうときはありがたいって、みんなのために使わせてもらいます」って、こういう人たちもいっぱいいたんだもん。自分も（物は）無いのにな。

こうして常葉にいるときなんか、常葉の人が体育館に（来てくれた）。あの当時は寒かったから、3月11日から避難始まったから、12、13日は雪がちらついていて大変だったんだ。（常葉の人は）昔、常葉の大火のときに、やっぱり毛布とか何か持ってきてもらって自分たちも面倒見てもらったんだって。だから私らも、こんなもんしか持ってこれねえけど毛布とか布団なんか持って体育館に来て、「寒くても何とか頑張ってくれ」って言って。あと、昼間なんか野菜届けてくれたり、いろいろなもの持ってきてくれて。自分たちも困ってると思うのに、おにぎり握ってきてくれたり、「これはうちにあるものだ」なんて言って。そういうこと、どこの体育館に行ってもそうだったから。

あのときは、船引の体育館に来たときかな。関西から、「右翼の人たちが車で支援物資持って届けてくれっから」って言って、本部から連絡あって。夜来るから、遺漏のないように対応してくれって。遺漏のない対応って。そしたら関西から船で新潟まで来て、新潟からこっちへ来る。燃料どこでも入れられねえからドラム缶積んで、軽油をつけてきて、そうして若い元気のいいようなお兄さん3、4人連れて支援物資を車さ1台いっぱい付けて（来るって）。ところがなかなか来ねえんだよな、（到着は深夜）1時か2時頃なんだもん。でも、せっかく持ってきてくれるっていうんだもん。そこで、俺だけ疲れてっから居眠りなんかしたりしていたんだ。「今少し頑張ってくれ」なんて、「来た」なんて言われて、それで荷物下ろしたりなんかするの手伝ってほっとしたらば、「困ってっときは、助けるのは右も左もねえんだ」って。「困ったときは助けるっていうのが人間なんだから。また来っからな」って言われて、みんなガクとずっこけたんだけれども。

でも、車1台、支援物資持ってきてくれて、そういうのもあったんだ。いろいろな人に世話になって、いろいろな形で。立場が逆だったら、町長、俺たちこんなことできんのかなって、職員の人にも言われたけども。そういう点ではありがたかったっていうか、こういうことの連続だったからね。

だから体育館にいるときなんか医療チームが来て、「もう職員も限界だから強制的に休ませろ」って言われたんだ。本当言うと、面倒見る職員がダウンしてしまうので。休ませてくれったって、そういうわけにはいかないって。じゃあ会津に移ったらば休ませるからって。でも会津に来て、やっぱり安否の確認とかそういうのがあってなかなか休めなかったんだ。よく頑張ってくれたなっていう思いもあるし。そんなことの連続だったからね。

—家族として大川原に帰ってくるという決断はどのようにされたのですか？

渡辺：子どもたちは、それぞれ家庭持ってたっていうか、1人は結婚してないんだけど、まだ。でも仕事は持ってるんだ、福島に病院に勤めてたりしてるんで。あとは勤めてたんでうちの妻は、私が帰って

くるなら、しょうがないから帰ってくるかって。本当に帰ってくるのかってあんときは（言われた）。「あんな所に帰れるの」なんて言ってる人もいたんだけど。こっちに、私は最初から「帰る」って言ってたから、帰ってきた。

でもこれは、東京電力の社員の人たちが復興っていう名目で（避難指示解除より前に大川原の）寮に来ていたし。あの人たちが行くんだらば大丈夫なのかなって。私も会津にいて復興の号令かけたって、自分が帰ってこなくちゃ駄目なんだって言って。俺が帰ってくることによって、町長も帰ってきたんだから俺も帰ってくっかなんて人が、1人か2人いただけでも役割はあんだかもしれないから、「俺は帰るから」って言って来たんだけど。

－周囲の反応はいかがでしたか？

渡辺：ここの家に帰ってきたのは、（大川原の避難指示が解除され、新庁舎が完成した 20）19 年の 4 月。町長も苦労したんだから、新しい役場庁舎に座らせるっていうか、「町長の椅子ば座らせるのは俺の役目だから」なんて言う職員の人もいてな。「そんなのいいんだ」って言ったけれども、「苦労したんだから、ちょこっとでもあれ（恩返し）しなきゃ駄目だ」なんて。「座らせるのが俺たちの役目だ」なんて職員の人で言ってくれるのがいて、そういう点ではありがたかった。

だから、私の町長時代っていうのは、大変だった。楽ではなかったけれども、職員も復興っていうのが一つの大きな目標だったし、そういう点では議員さんなんかもそうだったし。職員も議員も、あと町民の人からも背中押されたから、そういう点では恵まれてたっていうのは、一つの復興っていう大きな目標があったから。団結できたっていうか、そういう点ではいい時代だったのかなっていうか、割と充実した時代だったのかなっていうか。

－「充実した時代」だったのですね。

渡辺：でも本当に、いろいろなことがあり過ぎるぐらいあって、話し切れないくらいいろいろなことがあってっていうか。今でも結構マスコミ関係の人なんかは来てくれるんだ。あと、環境省とか復興庁の人なんか、役場近いから来てくれてる。今だから話せるなんていうこともいっぱいあるし。

でも、私が直接言わなくても、慣れた記者さんっていうのは外堀から埋めてくっていうか、職員からいろいろなこと聞きましたとかって、議員からこんなこと聞いたとか何かって、こういう既成事実があったんだってって、最後にきて、これありましたよねって。だから「マスコミをうまく使えばいいんだ」って言われたけれども、確かにマスコミを使えばいいんだっていうのは、3 期目ぐらいでよく分かって。その当時はテレビとか何かに出るっていうのは苦手で。俺、嫌なんだよ。でもテレビとかマスコミで報道されると、町民の人は喜ぶんだな。

毎回、不思議なもので、「町長、テレビで見たぞ」とか、「テレビで良かった」とか何かって。だから、新聞に出てたからって、新聞っていうのは必ずしも正しいこと書いてないんだって（言うけど）、そういう感覚でねえんだな。新聞に出たっていうのは、全てが正しいと思ってっから。だから困るって。

新聞記者にも言うんだ。あなたたちも町民に迎合するようなことでなくて、もっと深掘りするとか、本質を突くとか、もっと視点を変えるとか。ただフットワークがいい派遣記者も来るから。フットワークはいいけど表面なでるように書いて、これで震災の実態ですよなんてやられって迷惑すんだよと言うんだけど、「いやあ」なんて言って。これ取材受けねえからって帰すことも何回もあったんだ。でも知

ってる顔なんてのもいっからな、昔の記者なんていうのは。

—マスコミとの関係性はいかがでしたか？

渡辺：でも、いい協力っていう大きいのもあったからな。例えば朝日なんかとか、産経はあんまり来なかったんだけど、でも読売とかって（来てくれて）。朝日のよく来る記者っているんだけど、結構、全国版に載せちゃったから。そしたらある県の要職にある人がわざわざ手紙書いてくれて、随分いいこと書いてきてくれたんだよ。読んで、こんな記事書いてくれる人もいるんだって思ったけれども。いい協力あるなって、俺は思ったんだけども。

地元の民報、民友さんなんていうのは、意外と駄目なところあるんだ。「しっかりやってよ」って言うんだけど。「これはオフレコだから」なんて言って（話した）、結構本音の部分を新聞に載っけんだな。三行記事くらいで終わるのかなと思ったら、いきなり大きく出して。紙面を埋めるには本当にいろいろあるから。（記者は）書かねえわけだったけれども、本社のほうでってか、あれ（上）のほうで載っけだしたとか言い訳してるんだけども。新聞、マスコミの影響っていうのは大きいんだから。ある町長なんて、NHK でさえも本当にシナリオ作って書いてくっからね、出入り禁止だなんて怒ってやったんだ。仙台から来たり、東京から来るから、NHK はどっからでも来っから。

だから良く書いてくれればいいんだけども、やっぱりマスコミの影響っていうのは大きいから。ペンは剣よりも強しっていうんだから、あなた自分たちの書いていることにもっと責任を持ったり、もっとしっかり頼むぞっていうんだけども。プラス面もあっけども、マイナス面もあっから。

でも、これはしょうがねえんだな。俺なんかもぶら下がりっていうか、終わってから記者が来て、この記事についてとか、この問題についてってやらないんだな。なるたけ手に負えるようにしようと思うんだけども、そうはいかねえから。あと、同じ発言しても、右からのと左からのっていうか。確かにそれは記者の感覚っていうか、切り口で変わるのはある程度やむを得ねえんだけども。極端に言うと全く真逆みたいな記事も出てくるから。

だから、これはしょうがねえんだけども、本当に、富士山も静岡のほうからと、山梨のほうからっていろいろあるあれだ。これはある程度やむを得ねえんだけども、もっとやっぱり核心に迫るっていうか、そういうこと書いてくださいよ、大事なんだからって言うんだけども。おまえたちは若いからフットワークはいいけれども、駄目だ、こんなうわべ、表面だけの記事書いて、これが被災地です、これが復興を代弁してますなんて。

でも、テレビとか何かもそうなんだけれども、話しやすい人とか同じ人に（取材が）ダブるときあんだな。（それが）良かったって思う人と、なんだか、あの人のことは出さねえぞと言っとけよって（話す人もいる）。そうはいかねえんだって、マスコミの判断だからって。

—利綱さんのご友人はどれくらい大熊に帰還していますか？

渡辺：直接会えたっていう人は、そんなに会えないけども。今、徐々に帰りつつあるからね。だから、誰と誰とっていう、確認してるわけじゃねえけども、最初は帰って大丈夫かなんて言った人が、「やっぱりいいな、こうやって帰って町長よかったな」なんて言うんだ。俺も「帰って来い」って言うんだ。

財物賠償っていうか、家屋について東京電力とか国なんかも入ってやりとりあったんだけども。大熊から、例えば郡山に移りましたっていう人は、大熊の評価で価格出されて郡山に行くとなかなか家を

造るだけのお金が足りないってことで。差額分を出しましょうって東京電力と国がやってくれたんで、そういう点では家を造ることができて。でも家を造っちゃうと、仕事の関係もあるし、子どもたちの学校とか何かで、戻ってきたいけれども（大熊に戻れない）っていうような人も結構多いんで。実際、本当に3分の1が今でも迷ってるって。でも、誰と誰がとは言わないけれども、町長もいるんだから俺も戻ってくっどなんて人も（いる）。

だから複雑なんだな、家を造った人も。私も終の棲家を郡山に造りましたと。今度はもう決断がついたと思って覚悟したんだけど、時間がたつと、「そんな簡単な、単純な問題じゃねえんだよな」って言って。こっち（大熊）に来ると、やっぱりこっちに住みてえなと思ったりするしってね。それが正直な気持ちかな。そんなに簡単にふるさとってというのは捨てられないしって。

だから、二地域居住なんていう感じで、行ったり来たりすればいいんだっていう人も、割り切ってる人もいるし。でも、せめてお墓だけでも大熊に留めて、大熊に置いて、大熊とのつながり持てえんだっていう人もいるし。本当、十人十色っていうか、みんなそれぞれいろいろな考えの人がいるっていうか。だから一つの家庭の中でも、若い人と年配の人で違うし、男の人と女の人でも違うし。

3世帯なんて一緒にいた人たちが、今度、避難先ではみんなそれぞればらばらになったから。家族の絆が深まりましたって逆に言う人と、分かれてよかったっていう人いるからな。今度は、姑から解放されてなんていって、ルンルン気分ですなんて、正直そういうことも口にする人もいるんだ。寂しいなど思うけれども。でも、今まで大変だったけど今度は楽な生活になったなんてな。これも一つの選択肢なんだべななんて思って。だからもう定着しますって、大熊を諦めて定着しますっていうのもいるし。

あと、向こうに住居を構えましたっていう人も、私にとってふるさとってというのは大熊なんですと。だから、お盆やお彼岸に線香あげたり、いざっていうとき帰れるだけの環境をつくっててくださいってというような人もいたからね。

それもそのとおりなんだな。だから、あんた間違ってるなんて言えねえんだな、本当みんなそれぞれが考えて、やっぱりそれぞれを尊重しながら、地域づくり、町づくりに取り組んでいかないといかんからな。だから町長なんて、今の町長も大変なんだけど、一つの問題、壁クリアすると、また次の新たな課題が出てくるっていうかね。

だから、われわれもこうやって、せっかく戻ってきたんだから、戻った人に対して手厚く保護してくれっていう人も多いわけだ。そうすると、向こうに住んでる人は、こんな何人も戻んねえ所にお金かけてどうするんだって。われわれも町民だったんだから、もっとわれわれ離れた町民のためにお金を使うべきだって。だから、考え方っていうのは真逆なんだな。でもそれも、どっちの意見も正しいんだな。正しいっていうか、そういう意見っていうのがあって当然だと思うから。だから、これからどうすかっていう問題もあるし、今度、新たに移住してくる人たちに対して、そういう人たちの意欲を買ってやるとか、そういう人たちが住みやすい環境をつくってやるのも大事な選択肢だしね。

—震災の前と後で大熊に対する思いは変わりましたか？

渡辺：それはあります。前は、また自分が（町長）やってるときと違う形で見れるっていうのもあるんで。だからやっぱり変わったんだっていうような、自分が認識持たないとまずいなんて思って。よく変わりましたという感じで。だから、どういう感じで順応していかかっていう、だから、「もっと思い切った形で、新しい感覚で新しい町づくりお願いしますよ」って、言ってんだけどね。でも、あんまり言え

ねえっていうか、言わねえほうがいいなって思うときもあつから。自分ができなかったのに何を言っただなんて。

—利綱さんにとってふるさととは何ですか。

渡辺：そうだね、ふるさととは何ぞやとか言うとな、本当に食事でもいいねんし。

これだからふるさとですなんていうこともないし、いろいろな要因が重なり合っっていうか、私なんか、でも震災があったから、逆にふるさとっていうものを以前よりも意識したっていうか、そういう点もあるし。だから、やっぱり自分の心のよりどころがあったっていうのは、震災当時もそういう点では大きなバックボーンっていうか、支えになってるっていうのもありますし。ふるさとに対する思いっていうのは変わってもきたし。だからそういう意味では、絶えず絶対的なものではないんだと。いろいろな客観情勢が変わることによって、自分のふるさとに対する思いとか何かも変わってきたし。だから、そういう点ではいろいろあると思うんだけどね。

—今、大熊の好きなところはどこですか？

渡辺：大熊の好きなところっていうのは、自分が生まれ育った所に帰れたっていうのと、あと今度、以前とは違う形で新たな大熊がつくられていくんだっていう、わくわく感というかそういうのもあるんです。期待っていうのが。どういう形で良く変わってくのかなっていうか、そういうのもある程度見続けたいっていう言い過ぎだけれども、見てみたいっていうか。

基本っていうのは、自分たちがつくっていくんだっていう。課長なんかにも言うんだ。大変だっと思わないでくれよって。中東のドバイでなくて、俺たちが日本のドバイをつくるっていうふうな感じで。

どんどん自分たちの思いが反映されるっていうか、こんな新たなキャンパスに、自分たちの思いどおりの絵を描くっていうのは、素晴らしいことなんだよと。だから、震災で今までのインフラっていうか、公共施設なんていうのは、残念ながら使えないっていうのが大半だったんだから。下手に近隣市町村で、あれ残ってたから俺ここ大事にしなきゃいかんねえだっってとられることなく、自分たちで思い切った地域づくり、町づくりをして、自分たちがつくった町なんだって自信持てれば、こんな楽しいことはねえと思うんだな。だから、そういう点では、まっさらなキャンパスに自分の思いどおりの絵を描けるっていうか、そういう楽しみあつから、課長頑張ってくれよって、俺は言うんだ。

—町に対する誇りやわくわく感は震災前も抱いていた気持ちですか？

渡辺：震災前よりも今のほうがそういう、これからどういう町をつくっていくのかなっていう期待感っていうのが大きいかな。だから、昔はそこそこっていうか、今よりもちょっと良くなればとか。今はそうではなくて、大胆にっていうか、もう思い切った発想の転換で、よし、こんな町だから、俺たちも住んでえんだとか、本当に新たな移住者を呼び込めるようなものをつくるのが可能なんだ、今だったら。

だからある課長に言ったんだ、トヨタが富士山の裾に 3000 人位の新たな町をつくりますっていう。居住環境こうです、仕事はこうですとか何かって、いろいろなものを組み合わせながら、こういう所だったら住んでみたいみたいなのを思い切って、今の熊だだったらできるんだからね。やっぱりそういうのをつくってくれよっていう。「長生きしててよかったな」って言われるのを見てえなと思ってるの、

俺。

—未来の大熊に託したいものは何ですか。

渡辺：残しておきたいものっていうのは、ハード面っていうか、箱物っていうのはそこそこ残るんだけど、文化面っていうか、そういうものをやっぱり残してもらいたい。そして、新たなそういうものをつくり上げてもらいたいというか。

今までの、例えば神楽なんかも残しておきたいし、うちのじゃんがらとか、熊川の稚児鹿舞とか、ああいうものはやっぱり大事に引き継いでもらいたいと思うし。それに代わって、ある程度またいろいろな文化面で新たなものが生まれるとか、ちょっと派生したものでアレンジしたり何かしながら根付いていきますっていうものを。せっかくの震災だからそういうものを大事に、意識的に取り組んでもらいたいっていうのは思いはあるんだな。

だから俺、檜枝岐の歌舞伎なんか、大熊（との交流で）で来るようになって、私も大熊町でのぼりを寄付して、震災のときに行ったんです。村長なんかとも交流あったし、今の前の教育長は奥さんが檜枝岐（出身）だったんでね。だから歌舞伎を大熊の文化センターで披露してもらったときもあった。海のない檜枝岐だから、夏は大熊に来てキャンプ。（冬は）雪の少ない大熊の人たちが向こうに行って体験する。そういうことをずっと毎年やってたんだ。檜枝岐に行って、私、「村芝居の延長くらいかな」なんて思ってあんまり期待はしてなかったんだけど、正直。ところが、行ったらやっぱり400年も続いているのは、これは歴史の重みかなと思って見たんだけど。余韻が残るっていうか、正直、テレビの水戸黄門の勧善懲悪の世界だったら印籠出せば終わりだけれども、そうでないんだな、歌舞伎の世界。

一族で演目っていうか、それを決めていくと。人口は700人か800人くらいかな、檜枝岐は。福島県で一番小さな、人口の少ない村だから。この歌舞伎の継承のために東京に出てった人や、離れた人たちが集まって練習をして、そして今、春と秋は2回公演くらいで演じてるのかな。

そうして行ったときに、大熊でのぼり寄付したから、朝日と民報さんかな、3社くらいで終わってから舞台に上げてもらって。そしたら演者の人たちが、「町長、この舞台と一緒に上れるなんてなかなかできないんだから」とかって言って、冗談言いながらやったんだけど。いいから（檜枝岐の歌舞伎）見に来たほうがいいぞって、こないだ言った環境省のある人が、「町長に言われたから行ってきました」って言って。「良かった」って言って、わざわざ電話よこしたんだ。だから伝統文化っていうのは、相馬野馬追のために戻って来ましたって人もいるよね。ああいうものの力っていうのは大きいんだな。

だから、ぜひそういうものも、今まで、不毛の地っていったらそういうものをぜひ残してもらおう。そういうものの結び付きっていうのは大事なんだな。

経済面っていうのは優先されっけども、そうでない人と人とのつながりとか結び付きっていうのは、そういう（文化面）のを通して育まれていくっていうことが結構多いんで、そういうものに期待してっていうか。亜紀さんなんかやってきたしな。しっかりしてるから、何でもやっちゃうから。神楽なんて余計そうなんだ。

【第2回インタビュー】

—短大卒業から議員になるまではどのようなことをされていたのですか？

渡辺：普通って自分ではそう思ってたけども、長男だからうちに戻んなきゃなんないって帰ってきて、青年会とかやったりしながら。あの頃はいっぱい、田舎に残ってる人って多かったんだ。だから青年会活動なんてのはやったよな。独立した形で、地域の青年の人たちが集まってスポーツ大会なんつって、県大会とかあるんだよ。全国大会に通じる大会なんかもあって、陸上競技とか野球とかソフトなんてあったし。有志でいろんな活動あった。

例えば町民大会なんて運動会もあった。そこで宝財踊りとかなんかって、そういう踊りを自分たちで練習しながら披露したりとかね。相馬の農業高校なんかは、神楽とか宝財踊りとか、田植え踊りとかって、高校時代に高校の芸能祭なんつって（やって）、そういうの今でも残ってる。

珍しいっていうか、大事だなと思って。剣舞なんて、俺、農家の長男だからって相馬に行ったけど、5月には芸能文化祭で地域の人たちに披露していたっていうか。宝財踊りっていうのは、源義経が関所を超えるときに行ったって感じで、いろんな役があって。そういうのは割と人気あったんで、町の運動会なんていう日には披露した。嫁さまの支度をしたり、ばくち打ちになったりとか、ずっといろんな役があって。練習も必要で。

農業高校っていうのは、そういう伝統的に、ずっと伝わって。傘ぞろいっつって、前の予行演習のときなんかは、剣舞なんていうと大体、農家の人なんて昔は侍の子孫だったから、うちから刀を持ってくる。練習やってる内に、同級生はボンと。足に落として、刀がパッと刺さって、あれは俺、覚えてる。陣がさ、陣羽織を着てな。今でも、相馬農業高校は残してんな。ああいうのも大事っていうか。

何か芸能してないと、農業高校は家畜を飼ってなんかしてっから農作業とかに回されちゃうんだよ。あんなこと、家畜の肥料を出すなんてやってるんだらば、踊りの練習してたほうがいいから。俺、田植え踊りやったよ。紋付きの女性の格好してな。

浪江なんかも田植え踊り、残ってるけどね。こういう震災とかなんかっていうのを振り返ると、伝統芸能かなんかっていうのは結構、大きな役割を果たしてるね。大熊だったらば、熊川稚児鹿舞なんつって。あと、長者原でもじゃんがら踊りっていう、いわきではじゃんがらって残ってるけどね。そういうことやったりとか。特別じゃなくて、各地区にそういうのが残ってたっていうかね。

盆踊りなんかもやってた。そこの公民館で練習をして。ああいうのってのは、自分たちが楽しむっていうよりも、お盆にやると子どもたちが喜んで集まってくるし。あと、都会に出て、この地域を離れた人が、お盆の供養っていうことで戻ってきた人たちとの交流の場っていうか。そういうのがあるから、地元に残ってる人は大変なんだけどもやらざるを得ないっていうか、そういう雰囲気があったんでね。

—利綱さんの頃は、大川原で花火を上げていましたか。

渡辺：花火はなかったな、ここは。それぞれでやってるんで、大野の中心部っていうか、あそこで合同で盆踊りやりましょうなんていうような形でやって。（その時は）東京電力とか、町内の企業なんか協賛してくれて、（町）全部でやったりはしたけどね。あそのとき花火、少しやったのかな。

—子ども時代にお祭りなどの伝統芸能に参加しましたか？

渡辺：町でやってたのは、この宝財踊り。みんなでそれぞれの行政区の人たちの若い人たちが集まってやったね。盆踊りなんかのときは、みんなで集まって協力してやったね。

集落ごと（の盆踊り）もあったけども、やっぱり町ん中でやりましようなんつって。それぞれ時間（を決めて）、例えば大川原の青年会の人たちが集まってやって、その次、熊川の人がつつってやってたり。他にも町が主催とか、商工会が中心になってなんていうような形で、町全体のお祭りをやりましようとか、そういうのもあったんで。だから東京電力の人たちなんかも、ちゃんと浴衣を着たりなんかして協力してくれた。あと、バーベキューやったりなんかしてな。JAさんや商工会が中心になって。でも、ああいうのも品評会っていうか、収納祭みたいなもんかな、11月の頃な。文化の日中心に、町内で、町民の人でいろんな特技ある人が、そういうものを持ち寄ってっていうか。農作物、優秀な作品に町長賞とか何賞なんて付けてやったり。いいところはショーなんかも出したりなんかして、まとめて一緒にやるとかな感じで、そういう形でみなでお祭り気分楽しんでっていうか、そんなのもあったね。

夏祭りなんて、盆踊りは夜だけやって、出店なんかも出て楽しめる。子どもたちなんかは楽しみにしてるっていうか。

—農業の面で苦勞したことはありますか？

渡辺：農業っていうのは、俺なんか農業、百姓百品っていったけど、養蚕が最初は中心で。養蚕とか水稲、コメとか。あと、牛なんかも飼ったときがあるし。あと、タバコとかもやったな。高校から2年間だけ俺、宮城農業短大に行ったんだ。大学に行っちゃうと戻ってこねえからって言われたから、でも2年間だけは、しょうがねえからつつって行かせてもらって仙台に行って、下宿生活しながら。

—利綱さんが奥さまと出会われたのはいつ頃でしょうか？

渡辺：なかなか農家の嫁さんいなくて。見合いで紹介してもらって。しょうがねくてつつって。縁があったんだけども。確か33~34になってからだったな。晩婚っていわれてな。

でも本当にあの当時は、うちを守るっていうので。みんな、大野、大熊町からも10人ぐらい、相馬に行ったんだ、長男の人が。でも、だいぶ前に同級会やったら農業やってる人つつうのは2人か3人ぐらいだったな。みんなもう、いろんな商売やってるっていうか、事業やってる人たちで。

—好きな奥さまの手料理はなんですか？

渡辺：俺なんか何でも食べるほうだけど、肉とか魚って、どっちかっていけば魚のほうが好きだったかね。うちのやつは肉が駄目なんだ。俺は自分で買ってきて、これ作れつつって。げてもんっていうか、うちの周りつつうのはいろんな食べ物、食に興味のある人が多かったんで。特にイノシシ捕りとか。

魚なんて相馬の辺、あと請戸っていうか浪江町、あそこにも親戚いたから。今の時期なんていうとサケが遡上して。組合員に配達つつって、おばさんなんか、サケ8匹でも持ってってくれよなんつって。何匹も持ってきてる人、みんなに配ったりなんかしたからね。ここ熊川で、漁協でもサケ漁るのが数は少ないけど遡上してきたから。俺、43か4の頃から議員やったから、議員特権って届けてくれる。オスとメスとね。

親戚によってはイノシシなんか捕ったよな。俺、ああいうのが好きで、肉なんかよりもスペアリブって骨しゃぶったり。あれ、うまいんだよ。1頭、食べるだけじゃ駄目だから料理も自分で勉強したほうがいいんだって、ここへ来て、さばいてつるしておくんだ。俺も時々手伝わされて、川で流れ水に浸しておく臭み取れたりして。

これ1頭、さばくわけだ。皮をはいだりなんかして。骨しゃぶりつつって、いわゆるスペアリブの部分には肉をいっぱい付けて、頭は頭で冷凍室に入れておいて。そのための冷凍室、マイナス四十度ぐらいのやつ置いてな。イノシシとか魚なんて、いっぱい入れておいたんだ。モツなんかレバーなんてもう、きれいに洗って。あれ、食べるまでが大変なんだ、処理が。何回もゆでこぼして。あく強くて、においが残ったりすると食えないからな。イノシシはもうきれいにして。脳みそがうまいんだ。シシの脳みそ。オーストラリアなんて行くとヒツジの脳みそつつって。煮て食べる。

忘年会のときなんか、毎年、夜なのに朝から準備せないかんねんだ。骨、ゆでこぼすってというか、何回もあくを取るのにやって。ぐつぐつ煮たんじゃ駄目なんだよ。沸騰する前に何回も引っ繰り返して、うまみの成分、逃げられんようにして。今度きれいになったとこで、コブとかゴボウとか、かつ節みたいなものを入れて煮込むんだ。夜まで準備して。夜みんなでやると盛り上がるんだ。骨しゃぶったり、あと骨のスープでやる、うどんとか、ご飯がうまいんだ。

それやってくと、町長やったり議長やったりするとき、終わってそっちこっちで呼ばれるからな。レバーとか食べるのが楽しみだつつって。押し掛けてきて、ここで2次会、3次会やってんだ。レバーなんかもバツっと切って、もっとも処理って血抜きをしておいて冷凍にしておいて、かつ節とニンニク付けるけど甘くてうまいんだよ、生きのいいやつはな。特に、レバーもそうだけど腸、モツなんかもうまいんだ。

副町長はイノシシ捕りなんかもやるんだけど、取ればみんな骨しゃぶりやるといいなつつって。るんだけど、捕れねえんだ、まだ。俺なんか有害駆除つうのは町でもやったからな。そうするとみんな最初は珍しくて持ってくるんだけど、みんな飽きてたり、料理できちっとしねえとまずいから。産業課で、町長、これ持ってってくれよなんつつって。冷凍されてるやつのレバーとか骨とか肉なんでもらってきたんだ。肉も3歳から4歳のメスっていうのが一番、味いいつつって。脂が乗って。古いやつは7歳も8歳もなった古びたイノシシで、あれなんかカレーとかなんかで煮るとうまいけどね。

ぼたん鍋って、本当にボタン色っていわれて、すき焼き風に煮て。古いやつは駄目だけど、ちょうどいい肉っていうのは本当にうまいんだ。肉も魚も俺なんかは食うし。ある人が、町長、浜の人たちは魚好きだから、帰ったときに、いい魚屋さん連れてこいって言うんだよ。今、檜葉っていうのは、いい刺し身、売ってるけど。オオカワ魚屋に行くんだ、四倉。浪江の春先だと白魚が上がって。この間、大臣が4月に来たとき、ちょうど処理水放出すると、食べられねえか分かんねえからなんつつって、浪江の親戚が送ってくれたんだ。ホッキも上がったよな。大臣に、いつもうまいもの食べてるから、これ地元の料理だつつって食べさせたら、ホッキは刺し身で食べたけどもフライで食べたときねかつつつって。これうまいなって、ホッキのフライ、あと白魚なんかも。ゴンボっぱとかなんかもね。ゴボウの葉っぱな。ヤマゴボウの葉ってのはうまいんだ、天ぷらにすると。これ何だつつって、これはゴボウの葉、食べたときねえべって言ったら（大臣も）食べたときねえなんつつって、ここさ来るとき珍しいの食えんだなつつって。どぶろく飲んで喜んでいたりして。

俺なんかは自治体の消防をやったときで、やっぱり消防っていうのは集められて行進なんてばかりされると、なるたけさぼりたいってなっちゃうから。消防ってのは楽しいこともありますよって、入

ってくる人たちに、そういう気持ち持ってないから駄目なんつって。そこで旅行やるときは東京に行ったんだ。そして国技館で相撲、見てきた。あの頃、東京ドームなんてあったから、俺、親戚がそのとき読売の重役やってたから、券取ってくれつつって頼んでもらって。そんなことやったよな。だからやっぱり消防ってのは、つまりどこだって、確かに若い人ってそうなんだよ。朝、行って9時頃から2時間も訓練なんてっつ消防なんて入りたくなくなるかな。そうでなくて消防も楽しいですよ。

あとは、いろんな政治やってても同じなんだけども、自治、自ら治めるっていうのは、地域つつうのは自分たちがつくっていくんだっていうのが基本にないと駄目だと思うんだな。俺なんか議員になったのも、生意気なんだけど、人に文句、駄目だ何だどうだって文句言うんだったら自分でやったほうがいいっていう感じで。俺が酒飲んだとき余計なこと言ったから、今度いろいろと引っ込みつかねくなっちゃって議員なんてやってるようになったんだけども。しょうがねえからやりましょうでなくて、人に任せて文句言ってるなら、自分たちが出て、俺なんかよく首長やったり、あんたいい考え持ってるから、自分で出てきて、人に任せるぐらいなら自分が出てきて、よし、自分が住んでるところだから良くしましょうっていう、これが基本だからやるかっていったの。そんなことやってらんないよ、安い給料で人に文句言われて、なんて言われるんだけども、そうでないんだと思うんだな。ぜひ若い人が入ってきて、それが大事だと思うんだけどな。

—利綱さんを動かしている原動力や気持ちは何ですか。

渡辺：この前、ガキ大将魂があるのかって俺、言われたんだけども。ここ原子力発電所だったから、若いとき、何の役もねえときに、経団連会館でいろんな偉い人がいる中で、こうやって原子力発電所の青年の一人として参加してくださいって言われたんだ。大学教授とか、新聞社の論説委員とか、実業家の人とかって8人か10人ぐらいでテーブル、1卓の中でいろいろ話し合ったんだけども。そのとき、俺、今度いた人にも言ったんだけども、その中で自分の役割っていうのを考えればいいんですよ。私が大学教授と一緒に理屈論理的にどう、理屈かざしてなんつったって、そんなのは説得力ねえんだから、ここのいち町民としての発想っていうか、気楽に話すことが向こうだって求められるんだからつつって。

最初、行ったときにエレベーターに乗ったらば、すごい車に乗ってくる人が、いやーなんつって、今度の仕事の次はどうですかなんつって話してんだ。なるほど、経団連、こういうところの関係性みたいな、エレベーターの中で話すことも違うんだなっていうか。外国の話とか、日本の事情がなんつって、これが、ぽんぽんと出てきた話。トップっていうのは、こんな話してんだなって。俺たちは田んぼの話とかしてて、あーと思って。すごいなと思って。

そういう会議で何度か勉強させてもらったんだけどな。発電所関係で、渡辺君、俺、昨日、国会で参事人陳述で話してきたんだなんて（人もいて）。そうですか、なんて。そんな人、自分も負けねえなんて思ったって無理なんだから、基本が違うんだから気楽にやればいいんだっていうか開き直るっていうか。向こうも求めているのは、そんな高度な知識とかあれじゃなくて、いち農民として、いち青年として、地元、大熊町に残ってる人の感覚で話せばいいんだって考えれば開き直る。

だからガキ大将でいいや。ああいうところは無理だけど、田舎に帰ったら自分たちでしっかりと基盤盤固めっていうか、地域おこしは自分たちが頑張ればいいことだから。だからよく俺、言うんだけど、人口1万人の町なんていうのは、町長と議会がある程度リーダーシップ取ってこういうことやりましょうって、すぐ意見の集約ができて、まとめていけるんだな。会津若松に行ったとき、人口10万ぐらいで

意思決定っていうとやっぱり、議会も会派がでかいんだ。こんな 1 万人ぐらいの町だったら、議長、こういうわけだとか、俺、こういうことやりたいからどうだつうと、じゃあ協力するよってなるし。そういう点では物事が進みやすいっていうか。小さな町でいろんな短所もあるけども、これを長所と考えればやりがいがあるっていうか。それでも思わねえとやってらんねえんだ、逆にな。本音で言えばそれもあるんだ。

原発の事故後、なんつったって絶えず自問自答っていうか、これでよかったのかって。今の時点で自分が考えられる最善の策だ、ベストの案だって思ってやってるしかねなかったんだな。これ、間違ってるのかもしれないって思ったって、本当に答えのない問いに対して（案を）出してって。クレマーの人たちって、何やっても文句を、今の町長にも言うんだ。これ、やればやったでこんなこと必要かって言われるし、やんねかったら何にもやんねえって言われるし、トップになるってことは 7 割、8 割、批判されたり文句言われるのが仕事なんだよと。誰がやったって同じ、うまくいかねえんだから、自分で信念持ってやるしかねえんだよって。

どんなことでも、大変な時に、どんな取り組みでも国として応援しますよ、だから頑張ってくださいって言われるよな。いろんな人に巡り会えたっていうかね。

—子ども時代に伝統文化とどう触れ合っていましたか？

渡辺：この間、出てきた写真の中で、これは佑和良団（ウガラマトイ）総会記録ってあるんだけども。これ何年だっけな、2006 年だな。16～17 年前かな。ちょうど 100 年だったから 100 年祭っていうのが。

親族会っていうか結だったんだな。無尽講なんて経済団体みたいなので始まったんだけども。これ、後ろに七福神のあれがあって。7 軒でやってるやつなんで。だから（渡辺家は）えびす大黒、ああいうのここに（飾って）新年会ってやるんだ。この当時（の当番）は志賀町長、私の前にやってた町長。

一つの組織ってかあれなんだべな、佑和良団（ウガラマトイ）って書いた書なんてあるんだけども。これ、7 軒そろろと大変だった。あれ、絵は誰、描いたんだっけ。荻生天泉か。彼に描いてもらった。親族会なんていうとすぐ簡単にできて、すぐつぶれちゃうけども、七福そろろと見事なんだよな。正月の 3 日は毎年、恒例行事で集まって。

あの（100 年祭の）時ちょうど一つの節目だからつつって、民放さんにも来てもらって記事も出たんだけど。神主さん、いつも 3 日の日は来てくれて、おはらいして、今年 1 年良い年でありますよってっていう感じで。1 月の 3 日はもう予定、入れられないんだ。欠席なんか。日を待つっていう感じで。100 年続くっていうのは珍しいって。

—そのような集まりやお祭りには子どもの頃から参加されていたのですか？

渡辺：うちのおやじは弱かったから、俺は 20 代の頃から出てたんだな。最初は嫌だったんだ、こういう集まりな。年寄りと。でも、だんだん良さが分かってくるってのは、ある年代になってからかな。こういうのも必要なんで、よかれ悪かれ必要なんでっていう感じで認識するようになったんだけど、今は親戚とかなんか見ると、長男っていうのはずっと親戚付き合っていくのはやったからな。今、だんだん希薄になってきてるけども。でも、あれも大事だっていうか、そう思うようになったけども。

—今でも続けておられるものは何かありますか？

渡辺：震災でだいぶ変わったからな。この佑和良団（ウガラマトイ）も今、休眠状態だ。でも会津に行ったとき、1回やったけどな、会津で。存亡の危機なんだ。うち継ぐ人が早く亡くなったから。そうすると7軒で持ちちゃって、分家の人々が別に持ったって構わないんだけども。集まれば集まれんだけども、大川原にいるから、東京へ行ったり向こうから集まってもなっていうような感じで。

—大熊町と本との密接な関係について、どう考えていますか？

渡辺：（義務教育学校は）いろんな議会の人なんかも、いろんな意見あったんだけども、ああいう形になるまでは紆余曲折あって。今、こういう形で箱もの、ハード面にお金かけるよりも別なものにやったほうがいいんじゃないかねえかっていうような議会の声もあった。でも俺なんかは形から入るのも大事だから構わねえ、お金かけてやっから、教育予算なんていうのは過剰というか、余計かけ過ぎたってねえんだから、構わねえから思いきっていいものつくって教育長には頑張ってもらった。

開校式のとき、もちろん復興大臣は来たけど、文科大臣が来たり県教育長も来てくれて割と注目されて、今も結構、視察に来るっていうね。俺なんかいいと思うんだわ。あれが基準になったら困るんだっていう人もいたんだ。教育関係者は金かかってつったけど、金をかけていいものをつくるっていうのは、どういう形であれが活用されるかは別として、俺なんかはいいと思ってんだ。よくやったな、教育長、頑張っつったからあれだけいったよっていうんだけども。

俺なんかよりも、そういう点では一生懸命やってる、読書の町づくりつつって。本当に何言っても、そんなことばかりなんて言う人もいるけども、やっぱり読書。会津にいるとき、人口1万くらいの町だし、会津は10万かな。子どもたちが萎縮して埋没しちゃうんでねえかっていうのを心配したの、本当は。大丈夫かなっていうか。そしたら向こう（会津若松市）が、いいところに（学校の）場所、見つかったつつって。俺は最初は市内は無理だと思ったんだ。

でも、できるだけいい条件で子どもたちに勉強してもらおうっていうのが一番だったからね。そしたら、いいところ見つかったって。本当は役場のところよりも、河東のところ1カ所で間に合うと思ったんだ。そしたら思ったよりも人数が多くて、急ぎよこっち（役場のところ）になって。俺なんか見たら、なんせ人を集める、父兄っていうか大人を集めるために学校を立ち上げたなんて言ったけど、そうでなくて子どもたちが、正直どうするかって、大人が困ってるのはもちろんだけども、卒業式終わって、大人が自分たちの住む場所が不安定だって、子どもがかわいそうだから、まず子どもが優先するような形で教育長、学校、立ち上げんとつつって。あのとき、どうするかつつって。立ち上げるまでは正直いろいろあって。

昔から付き合いあったんだ。副知事に頼んでくれよなんて、言われたりなんかしながらいろいろやったんだけども、あのときはうまくいったっていうか。先生の確保も難しかったんだ。中学生が多かったから、あそこの役場庁舎のところに開放してもらって。でも中学生とか子どもたちの声っていうのに俺たちは随分、励まされたっていうか。

でも職員なんかで言ってたんだ、あの子どもたちがきちっとできるような環境だけはつくってやらないかないと。市長に頼みに行ったんだ。正直、びっくりしたんだって、学校造ってくれて来たって。昔の会津も、戊辰戦争で敗れて斗南に移村されたときに、食べ物より教科書、持ってつたって。そういう歴史があるんだって。だから町長、われわれどんな協力もしてやるからって菅家市長に言われたんだ。

菅家先生は、何かの縁だから俺たちが今度は面倒見る番だから、どんなことでもやってやるからつつつて。うれしかったな。

あのときは教育長とか節目のとき呼ばれてありがとうございますなんて、ちゃんと礼、言っていた。ここにも来たんだ。ちょうどこっちに来るっていったから、前の日、来て泊まっていったんだ。あの頃、教育長とここで飲んで、いろんなことあったなって。菅家先生は僕に、いろんなことをするよりも、大熊が学校教育にかけたっていうものを勉強してこいって、そんなもん遥かに参考だからつつつて。菅家さんは随分こういうことやってくれるよな。

室井市長のとき、大熊町は優秀な女性が2人いたから、福島医大に入ったわけ。そのとき（大熊の）教育長は、（室井市長に）大熊に学校、何校あるんだって言われた。一つだつつつたら、一つで2人も行ったのとかつつつて、会津には、こんなに（学校があるのに）あの年は医大に入れなかったんだって。すごいなって言われて。あの頃の学生は優秀だったんだ。

「少年の主張」だか子どもたちの行事があったとき、行って聞いたんだ。各クラスが何人か代表いるときな。発表する人はもちろん立派だったんだけど、聞いてる子どもたちが静かに、じーっと聞いてくれたんだ。あれが感心して、教育長、これは読書教育の効果だよって。大人だったら最初の1人か2人は静かに聞いてるけども、あとは私語でうるさかったりなんかするのに、子どもたちは最後まで、だーっと、1時間半か2時間ぐらいあったかな。静かにずっと聞いてくれるんだ。すごいなって。会津でも、大熊町の子どもさんは図書館の使い方がしっかりしてるって。あれは読書教育のたまものだと思うんだ。

—教育について思うことはありますか。

渡辺：（姉妹都市がある）オーストラリアに行ったときも子どもたちと一緒にいったんだけど、最初は小学5年生なんかも（交流事業で）行ったんだな。小学生で行くと厳しかったんで、じゃあ中学生からなんていうことに変えたんだけど。あるとき町の代表で行くんだから、ちょっと成績足りなかったら、次の機会に行かせるようにするべつつつて、ある子どもは落としたんだよ。そしたら研修かなんかのときに志賀町長から電話があって、せっかく（試験を）受けたんだからやりてえんだ、向こうに、オーストラリアに送りてえんだって。

その後、また電話、よこして。実際、やりてえんだ、せっかく行きてえって言ってるからつつつて。でもこんなにやりてえんならいいべって、その子どもが行ったんだけど。中学校から高校になったときに、オーストラリアに行ったのが一つの大きな糧になったって、人生変わったみたいに一生懸命生徒会長やったり。あの子を見てから、決め付けんじゃなくて可能性があるんだから、できる限り伸ばしてやるっていうのが基本かなと思ったんだ。

多少、でき悪くてっていっちゃあ悪いけど。俺よりもいいから、可能性にかけて背中を押してやろうと。子どもっていうのは変わるんだなと思って、あれから反省したんだ。基本的にはそうだと思うんだな。一緒に行った子が、俺が町長で行ったときなんかも、向こうに行って実際、英語ができなくて自分ではっきりしたんだって。今後、もう一回勉強し直してもう一回行きますって。そしたら、その子どもは本当に英語を勉強して、もう一回、高校になってからまた行ったんだ。だからやっぱり子どもっていうのは可能性があるっていうか。本当に決め付けだけで、おまえ駄目だからって言うのは。どんどん伸ばし合って、これが基本だなと思って、随分、「若人の翼」事業で教えられたことがあったな。

でも、よく言われるんだけど、議会なんかも、せっかく（オーストラリアに）送ってやっても町のためになんねえんだから。あれだけお金かけて、戻ってこねえ人は、金かけなくていいべって言うから、そんなけちなこと言わねえで、地球の裏側で頑張ってるって、大熊の学生時代にオーストラリアに行った人がどこかで活躍すれば、人材育成なんてそんなもんでいいんだからって。

基本はやっぱり進むべきって言ってんだけどね。大事だと思うんだな。俺なんかも総会で怒るときがある。前の町長は（中学生の）みんなに頑張ってもらわないと、私もやってる手前、肩身が狭いんだからしっかり勉強してくれなんて言って。それはそれでいいと思うんだけど、俺はみんなと中学校時代にオーストラリアに行って、南十字星を見てきましたって、これだけでいいから、そんなに気負わねえで肩の力抜いて気楽に見てきたほうがいいよって言うんだけどね。でも、最後は人材育成って人だから、人にお金をかけるってことだね。ハード面って、体育館造ったり道路作ったりすると維持費もかかるけど、人にかけとくってというのはランニングコストってかかんない。だからどんどん人にお金をかけて成長してもらっていか、それが基本だと思うんだな。

—利綱さんにとって、大熊の誇りに思うところはどこのようなところですか？

渡辺：確かに特産品なんかも、震災前はナシとかキウイとか果物があったり。（震災で）離れてみたら大熊の梨うまかったよとか、キウイよかったよなんて話してるんだけどね。

私も議員やってるおかげで、日本全国で足の踏み入れねえ県とか（はない）。俺、北の泊原発から南の薩摩川内まで全部、見たんだ。昔、一村一品運動やった大分の大山町なんかも行って見たとき思ったんだけど、特別なことやってるんじゃないねえんだな。特別なことじゃなくて、自分たちの地域を生かしながら自然と積み上げていったものが、桃栗植えてハワイに行こうなんつって。

だから特産品、これを作ろうと思って意図的に作るのも大事だけど、自分たちの地域の特性とか生かしながら無理のない形で一步一步積み上げていくっていうのが大事。よく町づくりでも地域づくりでも、近道もなければ王道もないんだっていうけど、そうだと思うんだな。特別な発想とかなんかで、特別な人が出てやるってのも一つの方法かもしれないけど、自分たちの地域に合った形で地道に積み上げたものが町の宝になったりなんかするのかなって。自然の中で、どういう形で頑張っていくべきかなって思うんだけどね。だから特産品ってのは難しいし、また継続していくっていうのも難しいんだよな。

一時的にばーっとよくなってしぼんじょうのものもあるしな。例えば隣の浪江町なんていうと、道の駅なんかも酒があって大堀焼も、一つの目玉商品あると、インパクトが強いっていうかいいんだけど。大熊は今、なくなっちゃったからね。今、辛うじてイチゴやってんだけど、まだ駄目なんだな。難しいってどこもそうだけどね、どこも同じだけど。特別な形でできねんだけど。大熊のイチゴもだいぶ力入れるんだけど、なかなか経営的には厳しいって。最初から黒字ってのは理想んだけど。

なぜ赤字なんだっていうところ、徹底的にある程度、分析したりなんかすれば打開策ってのもあるはずなんだけど。若い人なんか入ってきてくれたら。よく町長なんかも言うんだけど、農業なんかもそうだけど、高齢化してきて新しい時代についていけねえ人が多いけど、若い人だったらいろんな取り組みができるから、やる気のある人をしっかり後押しできるような仕組みつくってかなきゃ駄目だよって思うんだけどね。

—特産品以外にも大熊で自慢にできることはありますか。

渡辺：大熊の自然環境なんか、どこにもあるからな。何を売りにすんだっていうのも問題なんだけど。離れてみて自分たちっていうのは恵まれたとこに住んでたっていうのはいろんな人が言うからな。自然環境っていうのもそうかしんねえし、人の輪っていうのもそうかしんないしね。自分たちは気が付かないけども、第三者っていうか新聞記者とかマスコミ関係の人とか来ると、町民気質っていうか大熊の人のっていうのはあるし、富岡町っていうのは、またそれぞれ違いますよって。自分たちの気付かないとこっていうのは、長所っていうのはあるようだけども。

自信持ってわが道を行くっていうか、そういうのも大事だって。こういう時代になると周りとの比較っていうのになるんだよね。ここはやってるのに、俺たちとこはっていうんだけど、それは別の問題でな。自分は自分なんだっていうのをきっちり持てば、そんなに、と思うんだけどな。でも震災で本当にいろんなことがありましたっていうくれえあったから。俺は戦争ないから、いい時代に生まれてきたと思ってたんだ、正直。人生には、まさかの坂があるって。後期高齢者になってみると、77年も生きてくれば、いろんなあるのが普通なんだな。この頃はそう思ってた。プラス思考でいくっていうか、いろんなこと教えられていろんな人に巡り会って。人の出会っていうのは一番の財産になるっていうか。

—「人の出会いが一番の財産」この言葉が出てくる利綱さんの信条をお聞かせ願います。

渡辺：この年代になると、来る人を拒まず去る人追わずで。正直、同級生が来てたんだ、中学校の同級生。町も変わってきたってわけで、去年辺りから来始めたんだけど。1年に2回くらい来るんだよ、女性3人と、あと男性1人で。特に親しかったわけでもねんだけど、来て大川原地区に同級生3人いるっていうか、一杯飲みながら昔の話をしたりなんかして。我々の年代になると、そんなにくよくよすることもねえし、あくせくすることもねえし、楽しんでよかったって言ってもらえるんだったらそれはそれで意味があるし。あんまり気負わねえで、なるようになるっていうか、そんな感じでやっていますけども。役場に近いからいろんな人が、元気かなんつって来てくれるし。

いろんなこと、本当に何気ない一言の中から教えもらうってことあるからね。それは大きいと思うんだな。俺なんかよく田んぼなんて行って、イネの状況、見たりなんか見ると、今年は陽気がよくないから、肥料少し抑えたほうがいいのか、そういうのが意外とヒントになるっていうか。日常から特別な勉強するとかなんかじゃなくて、何気ない会話の中からちょっと参考になる話っていうのはいっぱいあるんだな。これは田んぼの話ばかりじゃなくて、いろんな付き合いの中でも。

やめると見えてくる事もいっぱいあるんだけども、自分はできねかったんだから、そんなことは言う必要はねえんだと思って。俺なんかも、いろいろ言ってくる人もいるんだ。今の町長に、前の町長も責任あるんだから、こういうときは言ってやったほうがいいと思うって。そんなこと、自分もできねかったんだから、そんなこと言うことねえんだって。でもあんまりいろんなことあったときは、こうやったほうがいいんじゃないかとか、こうやってやんわり言ってるけどな。でも自分だって面倒見てもらって何とかやってきたんだから。町長なんて、こんなに言うんだら、おまえやってみろって、ここまでのどにこんなんになって、それはやんねえかんになって本当だもんな。

何でも首長なんて、みんなそんな思いでやってんだから。でも自分で立候補して意思表示してやったんだからしょうがねえんだな。あんまり町長職にこだわってやんないかないってことはないんだけども、

ある程度、持ってやるのも大事だっていうのもあるな。だから簡単にやめますよなんて言ったら駄目だな。いろんなこと教えてもらったから、いろんなこと勉強させてもらったっていうのは、正直な実感で。

よく、やるだけやったんだけどもってというのはやんねえ証拠で、人間は時々うそつく生き物。植物は正直に答え返してくれるからな。今、ニワトリ飼ってんだけど、ニワトリだって面倒見てくれる人分かるから。前、放し飼いしてんだけど、俺の後、付いてくるんだ。うちのやつは動物嫌いだから全然。無関心っていうか。トリだってそうだもんな。結果っていうのは、結果オーライでいいんだけども。

※掲載情報は 2023 年 12 月現在のものです。